

御 挨拶

中 村 歌 右 衛 門

皆様、本日はお暑い中をご来場下されまして誠に有難うございます。
「葉月会」も今年は第十二回を開催いたす事になりました。中堅、若手俳優の技芸発表の場であり、歌舞伎邦楽若手の勉強発表の場としても益々盛んになって参りましてこんな喜ばしい事はございません。是もひとえに皆様方の温かいご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

本年もたいへん珍しい発表となりました。河竹黙阿弥原作の「戀闇鵜飼療」に依拠しまして葉月会台本とし、ご繁用中にもかかわらず、今回も河竹登志夫先生が監修に就いて下されましたことは、多くの諸先輩のご指導と併せて出演者一同いかばかり励みになりましたことか一同に代わりまして厚く御礼を申し上げる次第です。また邦楽と舞踊の勉強は「二人三番叟」と「お祭り」をご覧頂きます。

殊に昨年惜しまれて亡くなりました中村梅花を慕う大喜利の「お祭り」上演に際しまして、構成演出振付に及ぶご指導を頂きました藤間勘十郎師にはここに厚く厚く御礼を申し述べる次第でございます。

いずれにいたしましても、修業中の者ばかりでございます。稽古熱心にめんどてどうぞ年に一度の舞台を見てやって下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

尚、毎夏の開催にあたり惜しみなくお力添え下さいます指導の諸先輩はじめ関係者各位、並びに国立劇場の皆様には心より感謝申し上げます、この機会に厚く御礼申し上げます。

(伝統歌舞伎保存会会長)

平成五年八月

第十二回 葉 月 会 国立劇場大劇場

歌舞伎青年俳優 研修発表会
歌舞伎邦楽若手

藤間 勘五郎 振付

一 二人三番 叟

竹本連中
鳴物連中

加賀屋 歌 江	二 村 幸 雅
中 村 時 蝶	松 榮 忠 志
尾 上 梅 之 丞	土 肥 洋 史
中 村 紫 若	田 島 春 男
中 村 歌 女 之 丞	大 西 忍
中 村 芝 喜 松	谷 亮 一 郎

河竹 黙阿弥 作による葉月会台本
河竹 登志夫 監修 藤間 勘十郎 振付

二 戀 闇 鵜 飼 療

四 幕

持田 諒 演出

序 幕 隅田川身投げの場 (清元連中 出演)
二 幕 目 峠下安泊笹屋の場 (竹本連中 出演)
三 幕 目 笹子峠熊蔵殺の場
大 詰 石和川原鵜飼の場
料亭松源棧橋の場

三 お 祭 り

清 元 連 中

松 本 幸 右 衛 門	清 元 連 中
中 村 勘 之 丞	竹 本 連 中
澤 村 大 蔵	鳴 物 連 中
尾 上 辰 夫	長 唄 連 中
中 村 蝶 十 郎	保 足 俊 輔
中 村 吉 次	吉 田 匠

平成五年八月十八日(水) 十二時 開演
五 時 開演

主 催 後 援 日 本 芸 術 文 化 振 興 会

藤間勘五郎Ⅱ振付

二人三番叟

翁 松本 幸右衛門
千歳 中村 紫若
三番叟 尾上 辰夫
三番叟 中村 蝶十郎

歌舞伎の三番叟ものの中でも義太夫による本篇は、本来語り物であるだけに舞踊的要素を強調して面白い舞踊に仕上がっております。したがいまして、儀式性をうすくし、しかも莊重さをうしなわず、鳴物の特色を強調した調和の美しさに真髓があります。

今回、藤間勘五郎師に振付を頂き、暑中稽古に励みました。
辰夫・蝶十郎の顔合わせ、幸右衛門の翁、紫若が千歳を勤めます。

浄瑠璃 竹本 葵太夫
竹本 幹太夫
竹本 實太夫
竹本 道太夫
三味線 野澤 松也
鶴澤 泰二郎
野澤 賢治
豊澤 時若
笛 望月 長次郎
先手 田中 源助
頭取 田中 傳兵衛
胴脇 福原 鶴十郎
大鼓 田中 長十郎
太鼓 福原 鶴二郎

三代目中村梅花一回忌追慕

藤間勘十郎Ⅱ構成演出振付 藤間伊佐舞Ⅱ振付補

お祭り

芸者 お駒 歌 江
同 お幸 幸右衛門
同 お俊 時 蝶
同 お梅 梅之丞
同 お藤 紫若
同 お信 歌女之丞
同 お松 芝喜松
同 お和 歌 次
同 お文 歌 松

浄瑠璃 清元 榮志太夫
清元 志寿子太夫
清元 志寿雄太夫
清元 清榮太夫
三味線 清元 美治郎
清元 美邦寿
上調子 清元 美三郎

脇役の俳優による発表会でありながら、毎年、振付を快く引き受けて下さっている藤間勘十郎師が今年の特別企画「梅花一回忌追慕」の一幕を担当して下さいることになりました。中村梅花さんは女形の日標であり、いかに多くの後輩が慕い、かつ勉強してきたかをよく理解しておられた宗家は、歌江、幸右衛門、時蝶以下ずらりと並んだ後進の意気をくみ取って下さいました。

「お祭り」は、こうして宗家の構成演出振付により、脇役陣にとって夢のような一幕となって皆様にお目にかかることになりました。
興がのれば、妹ぶんの女形に囲まれて嬉しそうに芸談に花を咲かせた故人に贈られる珍しい「お祭り」です。くれぐれもお見逃しなきよう。

河竹黙阿弥 原作による葉月会台本
河竹登志夫 監修 藤間勘十郎 振付

こいのやみ うかいのかがりび
戀闇鵜飼療四幕

持田 諒 演出

序幕 隅田川身投げの場

(清元連中 出演)

二幕目 峠下安泊笹屋の場

(竹本連中 出演)

三幕目 笹子峠熊蔵殺の場

石和川原鵜飼の場

大詰 料亭松源棧橋の場

〔配役〕

新常磐屋芸者小松	歌	勘	歌	吉	歌	保	田	二	松	土	紀	光	吉	大	幸
鵜遣い 甲 作	之	之	女	田	足	足	島	村	栄	肥	義	紀	次	蔵	門
茅町米屋 穂積文三	之	之	之	田	俊	俊	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門
女房 お 崎	勘	勘	女	田	輔	輔	男	雅	志	史	義	紀	次	蔵	門
息子 徳太郎	歌	歌	女	田	松	松	男	雅	志	史	義	紀	次	蔵	門
宿の女中 お 六	歌	歌	女	田	松	松	男	雅	志	史	義	紀	次	蔵	門
鵜遣い 乙 松	保	保	足	田	足	足	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門
願人 坊 主	田	田	島	村	村	村	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門
若い者 丑 蔵	二	二	村	幸	幸	幸	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門
若い者 長 次	松	松	栄	忠	忠	忠	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門
丁 稚 左 吉	土	土	肥	洋	洋	洋	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門
探 索 鳥 蔵	紀	紀	義	義	義	義	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門
探 索 丹 作	光	光	紀	紀	紀	紀	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門
船 頭 三 八	吉	吉	大	大	大	大	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門
月の輪 熊 蔵	大	大	大	大	大	大	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門
船 本 賢 三 郎	幸	幸	幸	幸	幸	幸	春	幸	忠	洋	史	義	次	蔵	門

登場人物・その光と影

小松……下谷の新常磐家の芸者小松は評判の売れっ姐、宴席で知り合った米問屋の主人穂積文三と深い仲になる。やがて金の切れ目が縁の切れ目となり隅田川で心中をはかるが、一羽の水鳥が二人の運命をかえ、小松は死に遅れて一人逃げようとするところを博徒の熊蔵に見とがめられてゆすられた。もう東京では働けないと観念した小松の向かう足は自然に故郷の甲州へと向くのだった。

穂積文三……茅町の名代の米問屋。江戸も東京に変わった新時代に米相場の投機に手を出したが、失敗して家財は抵当に入る始末。馴染んだ芸者の小松を道連れに心中をはかって隅田川に身を投げたが、川下で網船の六右衛門に救われる。そこで小松は狂言心中だったと教えられてびっくり、許すことが出来ない文三はついに東京を立ち小松の故郷の石和村へ追いかけていった。

お崎……のぞまれて穂積家に嫁ぎ、亭主文三の芸者狂いにもじっと耐えていた健気な妻も、隅田川の心中事件が伝わるや、いたたまれずに家を出た。可愛い徳太郎を連れて生家の石和村へ。旅の途中、立ち寄った宿の女主人から手厚い看護を受けたが、患った両眼の

失明から、それが亭主の文三をだました芸者の小松であることをついに知らずに宿を後にした。外見は失明の闇に閉じ込められているお崎が、見せ掛けは明るいが闇の心を抱く小松の内面に初めて、一条の光を注いで旅立った。

月の輪熊蔵……博徒。甲州は猿橋の生まれ。もうけ話のあてが外れてヤケ酒をまおり渡し場でぐっすり寝入ったところを水音で目がさめた。見れば、どうみても、一人心中の様子、しかも生き残った女の目もさめるような美貌が男心を刺激した。「心中と見せかけて、男を突き落としたと番所へでようか」「さあ、それは」「それとも、おれの気ままになるか」「さあ」と小松は追いつめられる。いたぶる熊蔵はとどのつまり小松を思いのままにするが、旅の中途の小田原でうまく小松に騙されて逃げられてしまう。(この件は原作にあるが今回は脚色した)

船本賢三郎……まだ小松が本名の千代といっていた時分に知り合った。言わば小松の初恋である。やはり石和村の出身で元は武上、腕が立ち、闇に生きた男。千代の一生は賢三郎により、光から闇へ、闇から光へと動いた。この間に起きた文三との深間が心中事件であった。警邏に追われて隅田川を渡ろうとした賢三郎と、逃げゆく小松こと千代のすれ違いが象徴的である。

資料館

初演	小松	甲作	賢三郎	熊蔵	文三
明治十九年 五月 千歳座	五世菊五郎	五世菊五郎	七世團藏 (当時九蔵)	四世松助 (名人松助)	初世坂東 家橘

再演	小松	甲作	賢三郎	熊蔵	文三
----	----	----	-----	----	----

明治四十年 三月	四世源之助	四世源之助	市川鬼丸	尾上菊四郎	尾上芳三郎
大正二年 二月	四世源之助	四世源之助	浅尾工左衛門	中村勘五郎	中村芝鶴
	(宮戸座)				

默阿彌 — 沈黙のひびき —

持田 諒 (演出)

默阿弥は不思議な人でした。自分の天命をあと何年と長女の糸女に告げています。

欧米の視察者がもたらす演劇改良の声は日増に盛り上がりをみせ、「恋闇鵜飼燦」が上演された明治十九年(一八八六年)はその勢いが、七十一才の默阿弥を直撃した年でもありました。

余命を七年と察んでいる默阿弥にとって、これから起ることは狂言戯作の素材にみえたのかもしれない。政・財・官・文界の中枢にある人達が「演劇改良会」を設立し、「狂言作者は無学無識、その作物は猥雑野卑……高尚な言辞による演劇を」と趣意書を発表すると、新聞紙上に臈月堂主人(坪内逍遙)が「河竹默阿弥翁に告ぐ」と題して、『世間の高尚に媚るなかれ』と励ましの一文を載せました。翌明治二十年の「天覧歌舞伎」は団・菊・左・芝翫と劇界勢揃いで、外国の使臣にも披露された歌舞伎史上空前の晴れ舞台でしたが、「高時」「伊勢三郎」「土蜘蛛」と默阿弥作品が三本も上演されたにも関わらず作者の姿はありませんでした。

江戸歌舞伎の真柱として、三百五十余篇の作品を積み上げた巨人は、への字に結んだ口元そのままに、一言の弁明も反駁もしていません。作品を日念に読んでいくと、その沈黙が頑迷陋固の狭隘さに立つのではなく、氣宇壮大なひびきを秘めているのに気付きます。

家族を愛し、知己友情に厚く、義理人情に細かで阿諛追従を嫌った翁は、一滴も飲めない酒席を語りで温かくしたといわれます。自分と云う生命と宇宙との関りをいつも心の掌で確めたしかめ生きてきた人、私にはそうみえます。

何故なら、彼の作品中の人物が、猥雑な言葉を吐き、卑劣な策を弄

○…脚本として「恋闇鵜飼燦」が世に出たのは明治十五年三月、雑誌「歌舞伎新報」(二〇六号)に連載されました。これは、二度目の雑誌発表で、第一作が「霜夜鐘十字辻策」、第二作が今回の「恋闇鵜飼燦」であります。

○…初演の配役は別掲の通り、五代目菊五郎の芸者小松の出の美しさは、今日まで語りぐさになっている上、二夕役の鵜遣い甲作には凝り性のところを見せて「わざわざ小佛峠や鵜飼の実地調査をして道具まで買い込んで工夫した」と伝えられています。

○…再演は四世源之助、大正期に殆どの再演を手掛けている「田圃の太夫」こと源之助さんの意欲には毎度感心させられます。しかも、二度にわたって舞台にのせている記録には敬服させられる上、芝居に携わっているわたくし共を叱咤激励しているように思えてなりません。今後の指針であることに間違いありません。

して、善男善女を深い淵に陥し込む、が彼等もまた皮めくると……といった構図こそ、世相の情場を借りて、生命と宇宙との関りをみせる默阿弥の作劇術、そのものであると云えるからです。

* * *

中村歌右衛門丈の下で永い間芸の修業を続けている加賀屋歌江さんが、葉月会を成島和男さんと興されてから十二年になります。稽古の間を取るのさえ苦しい状況で意欲的な公演を続けることは至難なことです。慎重に重ねていった手習公演を、中村歌右衛門指導「東海道四谷怪談」のお岩の演技に結実させました。伊右衛門役の幸右衛門さんとの気合いは、以後、埋れた古典の復活に挑む上での柱となったようです。「敷島物語」で四役早替りを、「白浪五人女」で素走りお熊、「傾城重の井」で重の井、と、作毎に工夫を重ねてこれたのも、演技陣をはじめ沢山の協力者の和があったからとは歌江さんの口ぐせです。

今回もベテランの大蔵さんに、勘之丞さん、歌女之丞さん、とひたむきな演技陣に附の政吉次師、義太夫の葵太夫さん、清元の美治郎さん、辰夫さんの立師と、力強い支えが入ります。

「恋闇鵜飼燦」は時代の潮流に作者の複雑な心情がこもった作品で、八幕十六場の全場に密度と緊張感が良く、脚色の苦心が伺えました。芸者小松が狼に襲われ、喰い散切られた首が石和川を流れて、鵜匠の兄、甲作の手に抱かれる……その一点に默阿弥の時代への言葉を感じて上演の柱とし、『夢醒め』で晴れさせて頂くことにしました。

中村梅花師追善となる今回も、親身に協力して下さるスタッフ陣、勉強の機会を与えて下さった方々に感謝の想い深く稽古に入っています。

三世中村梅花 師を偲ぶ

葉月会のお師匠役であった中村梅花さんが昨年の七月一日に亡くなられた。三世中村梅花さんは、脇役女形の目標であった。いつもなにかわからない時「梅花さんに伺った？」というのがきまり文句、それは辞書を引くような原点だった。葉月会が芝居を勉強するようになった第二回から、歌江以下、多くの立役に至るまで、十一年間の指導の貴重さは筆舌に尽くしがたい。その霊峰は、葉月会がそこを目指した登頂の高みである。

葉月会公演表

第2回	『どんどろ』	お弓 歌江	おつる 宗丸	妙林・妙珍 延寿・左升	昭58
第3回	『朝顔日記』	深雪 歌江	阿曾次郎 勘之丞	徳右衛門 幸右衛門	昭59
第4回	『身売の累』	かさね・柳葉 歌江	与右衛門 幸右衛門		昭60
第5回	『四谷怪談』	お岩・小平・お花 歌江	伊右衛門 幸右衛門		昭61
第6回	『女団七』	お梶 歌江	三婦 勘之丞	お辰 歌女之丞	昭62
第7回	『志渡寺』	お辻 歌江	源太左衛門 幸右衛門	内記 松之助	昭63
第8回	『切られお富』	お富 歌江	安 幸右衛門	お滝 藤車	平1
第9回	『敷島物語』	敷島・お玉・主鈴 歌江	十三郎 千次郎		平2
第10回	『白浪五人女』	お熊 歌江	お六 藤車	神道徳次 幸右衛門	平3
第11回	『傾城重の井』	重の井 歌江	興作・慶政 千次郎	つな 藤車	平4
第12回	『戀闇鵜飼療』	小松・甲作 歌江	文三 勘之丞	船木 幸右衛門	平5



三代目 中村 梅花さん
——やさしさときびしさを
たたえたほほえみは
今も慕う人々の胸に生きている——

かりかりした青春時代に、梅花さんにお目にかかった。昭和三十年五月の楽屋。当時二十五歳の若僧には梅花さんの偉さがわからない。それでも早くからお目にかかれたので、晩年の「梅花先生」を、さん呼ばわりでお話する特権が嬉しかった。葉月会の「どんどろ大師」から毎年の暑い盛りには、お住まいの市川真間から来て頂いた時には、身の縮む思いだった。お詫びすると、「お天気はあなたのせいじゃありませんよ」と庇って下さった。うだる暑中でも「夏は暑いのにきまったものですよ」とも言ってお下された。そんな声が聞こえてくるようである。

遺言から新聞計報にものらなかった時、演劇評論家の富田 宏氏が東京新聞の夕刊（八月二十九日付）で、その死を悼み美しい文章で見送って下さった。氏は書いている。



『傾城重の井の掛け（衣装）の模様が薄紅の花を咲かせた梅の木。歌江が梅花先輩への献花として選んだ衣装？と想像したら、ジンときた。（本冊の写真集に写真掲載）添えられてあったイラスト。梅花さんが雲に乗って天国へ、見上げた重の井が「お母さん」と涙をながしていた。葉月会の母を梅花さんとすれば、富田氏はマスコミの父として「どんどろ」から十年間書き続けて下さった。

過ぎし日の「入谷の寮」で「羽三郎梅花」でならした千代春千代鶴ねえさんの舞台が鮮明に蘇る。「みどく」というのだろう。見

といてよかった財産の一つで、最近特に見せびらかす年齢に成ってしまった。いつかくる瞬間は必ず到来する。梅花さんの逝去を知った時、これがその瞬間か、とひそかに息をのんだ。ある人と面談中で「何があったんですか」と訝られた。やはりショックだったのだ。ご指導の感謝らしい何ものも果たせぬまま、その時を迎えてしまい、またお詫びが一つ出来てしまった。今度は「あなたのせいではありませんよ」と庇っては貰えない遠くへいらしてしまっただけで、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（編集部 成島和男）

梅花さんの菩提寺は浅草田原町の清光寺。銀座線の田原町駅下車、一分とかからない下町にこれほど静かな境内があるとは信じられない。庶民的で静謐を好んだ故人にふさわしい墓所である。

葉月会 稚魚の会 歌舞伎会の一岡が一回忌の墓参をしたのが、六月二十九日。そろそろ指導稽古の日程の打合せなどが始まるこの季節、もう「梅花先生」はいらっしゃらない。しかし後輩の特権である「若さ」は、話が弾むと溢れ出て来てしまう。稽古の合間をぬって集まった一岡がカメラにおさまった撮影の表情は、梅花先生のお参りが出来たというだけでこんなに和やかになることを思わず証明したような、和気あいあいの集いであった。（中央は、梅花さんの弟さんと妹さん。歌江さん始め養成課の人々の顔も見えた。）

集 真 写 〔井 重 城 傾〕 平成 4 年 8 月 16 日



(三幕目 田中慶政殺しの場)



(二幕目 別座敷の場)



(二幕目 別座敷の場)



(序幕 傾城重の井部屋の場)

花菱屋おつな(藤車)を中央にして双六(すごろく)に興じているのは、
〔右〕に官太夫(幸右衛門)、〔左〕八平治(大蔵)の兄弟。「染分手綱」
では、三吉と共に有名な「双六」(すごろく)を黙阿弥は身請け争いの雌雄
を決する茶屋遊びに使いました。
珍しい舞台面です。不安気に見守る傾城の重の井(歌江)―上手、下手に
井筒屋女房のおよし(梅之丞)。見守るじねんじよのおさん(今泉 愛)と
禿しげり(大久保忍)。

へほんに思えば疑いの深い仲にもまだ深い、二人が縁でありながら今の勤
めに引きかえて、心由留木のお屋敷に奥と表のご奉公、と口説きの振り事の
一場面。

ひそかな逢瀬にも、興作は重の井に傾城勤めをさせている男の不甲斐なさ
を嘆き、そんな事よりも早く仇を討ちたいという、重の井(歌江)と興作
(千次郎)の二人。

千次郎さんは片岡我當さんのお弟子。女形の美しさも定評があり、葉月会
でも早く見せてほしいという声は高いのだが、立役が続いている。

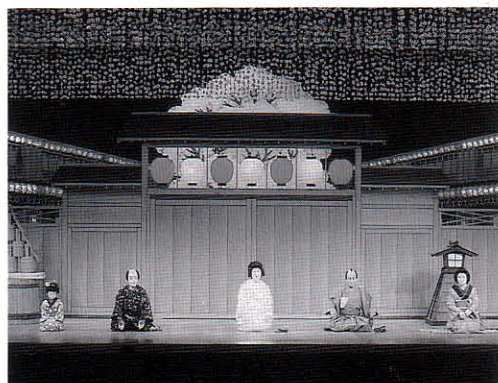
ことに、この芝居では二タ役。五代目の小團次が、興作と慶政を兼ねてか
ら、二タ役が口伝のようになった。千次郎さんも、興作と座頭の慶政を演じ
分けたのが上の写真。

重の井のために用立てた百両の大金を、山形屋の義兵衛から返せと迫られ
て困窮している慶政。それが重の井を助けた百両であったことを初めて知っ
た重の井の表情は憂いを深めるばかりであった。

この急場を救ったのが、じねんじよのおさん。ともかく、そろった百両を
懐に入れ、慶政が義兵衛の家へ向かうのを確かめた八平治は、重の井身請け
の百両はしめたばかり待伏せた。相手は盲目の按摩である。夜はいらない。
慶政は闇に住んでいるのだ。

八平治の憎々しげないたぶりの前に打ちひしがれる無力の慶政。赤子の手
をねじるような殺しが始まった。

写真集 井の重の傾城 昨夏の舞台から



(大詰 仲之町敵討ちの場)



(三幕目 元の重の井部屋の場)



(三幕目 元の重の井部屋の場)



(三幕目 田中慶政殺しの場)

逃げまどう慶政。いたぶる八平治。立師の尾上辰夫の工夫が目された。応えるかのように、慶政の千次郎の努力と大蔵の稽古熱心が三位一体となって結実した。遅く稽古場の鍵を閉めに行くと、皆帰った筈の稽古場にひと気がある。のぞくと慶政と八平治は夢中であった。「秀逸」と劇評された「慶政殺し」はこうして生まれていった。

一方、大金の百両を拾ったといつて重の井の急場を救った、おさん（今泉 愛）の言動に決して満足していた重の井ではなかった。けれども、がんぜない子供のこと、可愛い童心を傷つけたくはない。気がつく、おさんを、ただの女の子とはどうしても思えなかった。おさんも又、生んでくれた母の重の井と、同じ名の傾城を母のように思えて成らないのだった。黒地に飛び梅の打ち掛けが実にびつたりと美しい。

今の境涯を悲しむ母子に助け船を、と名乗り出たのが花菱屋のおつな、実は、以前に由留木家で若党勤めをしていた八蔵の妹つな、とわかった。「どうぞ、兄になり代りご恩奉じがしたい」と申し出て重の井もびつくり、互いに見合うきまりの形についた一場面。

藤車（下手）さんの力量はこういう役でふんだんに発揮される。

歌江・藤車の顔合わせは白浪五人女以来だが、将来の面白い顔合わせが待たれているご兩人、ひっしと四つに組むような芝居の企画をそそられる二人である。

「とーざい、ト、とーざい」のいわゆる東西声がかかって芝居はそこまです、役人は舞台に並んで「本日は これぎり」とお辞儀をする。中央に、歌江の重の井。上手へ幸右衛門の官太夫、下手に千次郎の興作。両上下に、梅之丞のおよし、今泉愛のおさん。

一同が、隅々へ挨拶して頭を下げた時、場内に掛け声と拍手が膨らんだ。その怒濤のようなうねりと歓声と万雷の拍手とを私は劇場の片隅で目撃した。熱いものが貫いた。

誌上対談

お蔭さまで葉月会も十年の時を刻んだ。歌江・幸右衛門さんら、何百人の俳優、邦楽若手の出演。衣裳・床山・小道具さん達の協力。大道具・照明さん達の支えなくしては継続出来なかった。舞台が総合とは真実。最近五年を回顧し、誌上対談の構成で秘話をお届けします。

（編集部）

B―今年は源之助さんが上演して以来の「鶴飼」ですね。

A―明治の大歌舞伎が初演したものを、源之助さんが殆ど小芝居で再演しているのにはほんとうに感心させられます。見習いたいと思います。

B―「敷島」といい、「傾城重の井」といい、掘り出しが評判ですが――。

A―葉月会がお客様に満足して頂く為には、作品の珍しさも加味しなければなりませんし、本公演で見られる狂言を勉強していくだけでは、見に来て頂けるお客様には限度がありますものね。本公演では見る事の出来ない狂言を勉強する事で、二重の楽しみを用意しておかないと、今はむずかしい時代です。

B―ほんとに。企画はいつごろ？

A―そんな堅苦しいものではありませんが、いつものメンバーが顔を合わせれば芝居の話ですから、それを会議なんて言ったら、企画会議は何十回になるか――（笑）

居がお客さまにはいいんだ、って、なんだかとってもよく分かりました。

B―さすがに東京なんです。江戸狂言は人気がある。

A―そうですね。その翌年はやはりいろいろ探しましたが、久振りにどっしりした義太夫ものをやろう、というのが「志渡寺」を勉強しました。

B―あの本水をかぶったポスターを作った時？

A―そうです。意気盛んでした。地下の駐車場に大道具さんが井戸をこしらえて下さって、電気部さんが大変でした。丁度大劇場では本公演をやっていて、もしも漏電でもして停電したらそれこそ大騒ぎです。厳重な配線と点検を繰り返して始めました。

B―たいへんでした。思い出します。

A―歌江さんは十七杯の水をかぶりました。撮影の青木さんの掛け声で、ざぶつ、とかぶっては、もう一杯。ハイ、という掛け声でもう一杯、という具合でした。

B―寒くなかったですかね？

A―葉月会が夏でよかった、と思ったのはその時だったとか。

（笑）

B―その翌年が「切られお富」でした。

A―黙阿弥シリーズのはじまりです。お富は一度は習いたい役。「源治店」のお富は皆様おなじみですから、「切られお富」を選びました。

B―大喜利の清元の舞踊が押しものでした。

B―会えば芝居の話ですものね。

A―正直言いますと、その年の葉月会が終わった夜に、もう来年の話でしたよ。

B―それはそれは。（笑）

A―なんといっても年一回の公演でしょう。お疲れさまッ、来年も頑張らしましょうね、と言う時には、来年はあれをやりたいなあ、って。（笑）

B―そうやっていつしか十年。

A―年の話は役者に禁物、です。

きっかけは「女團七」

B―第六回が転機とか？

A―手応えのようなものを感じたのは、「女團七」の時です。台本はこんなうすい本なのに、芝居にすると、それは面白い芝居でした。現時蔵さんの祖父の、時播磨が得意にしていた狂言で、女形なら一度はやってみたい役なんだそうです。

B―その時、亡くなった梅花先生に歌江さんが褒められた？

A―そうでした。初めて褒められたと歌江さんが喜んで記憶があります。仁俠で、情感がなければいけない。お婆、に延寿さんが出て下さって、お客様が久し振りに芝居らしい芝居を見た。こういうのを是から見せておくれよ、って、とても喜ばれました。ああ、そうか、こういう芝

A―「切られお富」は随分出ても、あの清元は滅多に出ません。ご宗家のお蔭で舞台に乗り、こういう形で新しい中幕物をお客様に見て頂けるなら、と思いました。清元の志寿朗さんにも助けて頂き、葉月会は幸せです。

「ぎづけた」敷島怪談」の上演

B―その翌年が、話題の「敷島怪談」。第二の転機でしたね。

A―いつだったか、旧ソ連の海外公演の時に、河竹登志夫先生と一緒にした歌江さんが「敷島怪談」は面白い芝居ですよ、という話を聞いて覚えていたんですね。毎年、葉月会の企画で悩んだ時期に、この記憶が蘇ったんだそうです。一念のお蔭でしょうか。叩いた歌江さんに門は開かれたのです。

B―一念あればこそ「記憶」ですね。いつも芝居を考えている人ですからね。

A―それから河竹先生のご許可を頂いて本にかかりました。脚色、長唄の附帳、義太夫の作曲、清元の作曲、中幕の振付、今思い出してもよくあれだけ纏まりました。

B―「群像」に掲載の劇評がまた素晴らしかった。渡辺保先生の論文でしょう。

A―嬉しかったですね。何度も読みました。

B―自信ができましたね。

A―それと、黙阿弥の凄さを体験しました。白浪作家というだけでない、多くの世界があの大全集の中に埋蔵されている、という発見。

B―少し大袈裟に言えば、鉱脈の発見でした。

A―それで、五人女へ。

大入り満員の「五人女」

B―「白浪五人女」が宣伝に入るや、どんな芝居だ？という問い合わせが次々。

A―それまで葉月会を横目に見ていたような人々が、どこでもいいから見せてくれて電話があつたのには、ほんとにびっくりしました（笑）

B―制作冥利につきた？

A―ほんとにそう思いました。

B―「五人女」は大詰の立廻りのからみの稽古が大変だった。

A―ほんとによく稽古してくれて、自分達の発表会だからといてもあれ程遅くまで稽古を積んだのには頭が下がりました。

B―それが、次の「傾城重の井」の発表に継承された。

A―「傾城重の井」のような廓物の貴重さがよく分かった。

B―歌舞伎が継承している「重の井」ものの大切さがしみじみと伝わってくるのは、制作に携わったお蔭であって、伝承とはただ在るものをなぞるのも大事だが、作っていかうとして難しさに突き当たった方が体得出来ると分かったのは発見のような気がする。

A―貴重な経験でした。

B―全集に埋蔵されている台本を、長唄、清元、竹本の現役の力を集めて舞台化する過程で「伝承」の実習問題が噴出してくる。この回答を発表するのは、ほんとに試験の答案を書いて提出するような、ぞくぞくするものがある。不安や、過信や、錯誤の連続かも知れないが、褒められた時の嬉しさは難関を突破した歓喜に近い。

A―苦勞を忘れて次の企画に入る訳だな。

B―お蔭さまで順調に行き過ぎているのかも知れないが、ここまでこられた葉月会の総合力は、結果も大切だが、発表が伝承になっているという認識で頑張っているのではないかと思う。

A―そう信じて、頑張りました。

B―お互いに。今日は有難うございました。

A―こちらこそ、有難うございました。

褒められた発掘の精神

（文責編集部）

長唄	芳村伊千四郎	浄瑠璃	竹本葵太夫	狂言作者	竹柴純平
鳥羽里一郎	竹本幹太夫	頭取	穂野吉昭		
松島庄丸	竹本實太夫	つけ打ち	古賀学		
三味線	杵屋長之介	三味線	野澤松也	立師	尾上辰夫
片山藤太悟	鶴澤泰二郎	豊澤淳一郎	振付指導	藤間伊佐舞	
田中勸四郎	豊澤時若	美術	国立劇場	碓山喬康	
田中長一郎	豊澤賢治	照明	富田修好	音響	中山靖浩
田中源助	野澤賢治	舞台監督	杉山美樹	金井大道具	
堅田喜代蔵	作曲	竹本葵太夫	金井大道具	パシフィックアートセンター	
福原鶴二	浄瑠璃	清元榮志太夫	日本演劇衣裳	東京演劇かつら	
福原涼佐久	清元志寿子太夫	清元志寿雄太夫	東京演劇衣裳	東京演劇衣裳	
亀井雄三	清元清榮太夫	清元清榮太夫	藤浪小道具	藤浪小道具	
望月長次郎	三味線	清元美治郎	藤浪小道具	藤浪小道具	
望月太喜治	上調子	清元美三郎	藤浪小道具	藤浪小道具	
稀音家政吉次	作曲	清元美三郎	藤浪小道具	藤浪小道具	
鳥羽里長	作曲	清元美三郎	藤浪小道具	藤浪小道具	
鳴物指導	田中傳左衛門	作曲	清元美三郎	藤浪小道具	

編集だより

○この十年はほど長い梅雨は初めてでした。汗かきながら原稿を入れた葉月会なのに、外へ出ると雨でした。当日十八日の晴天を祈りつつ校了しました。

○例年お馴染みの尾上梅之助さんが今年はお演出来ず、来年を期待しています。

○梅花先生に先立たれて一年が経ちました。一回忌追慕の頁をせめて作りましたが、淋しきはこれから日増しに大きくなるばかりでしょう。人は百代の過客とは申しながら、無常の世です。子規の「はて知らずの記」の中の二句を引かせて下さい。

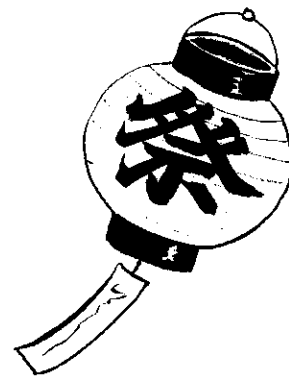
われは唯旅すずしかれと祈るなり

子規

* * *

来夏のご米場をお待ちしております。

(成島)



発行 平成5年8月18日

〒102 千代田区隼町4-1 国立劇場

社団法人 伝統歌舞伎保存会

葉月会

編集事務 成島和男

☎(3265)7411番

印刷所 ハイビジネス